

## シンポジウム14

### 感染制御担当者に求められるマネジメント力

2018年2月24日(土) 10:10-11:40 第11会場 | 国際館パミール 3F 香雲

[司会] 本田 仁 (東京都立多摩総合医療センター 感染症科)

[司会] 小野 和代 (東京医科歯科大学医学部附属病院 看護部)

#### 【司会のことば】

医療機関における感染対策は複雑である。エビデンスのある感染対策をアナウンスするだけでは医療機関における感染対策は進んでいかない。また適切な感染対策を進めて行くにあたり、インフラストラクチャーの整備、そのための資金の獲得、そして医療機関全体としての積極的な協力を仰ぐため、病院経営者や病院上層部などからの理解と協力も不可欠である。また医療機関における多くの感染対策には手指衛生に見られるように、医療従事者の行動変容が伴う必要がある。

医師、看護師、薬剤師をはじめとする感染制御を担当する者が有機的に機能し、各医療従事者の行動変容を促し、必要な感染対策を履行できるようにしていくことが求められ、また病院の意思決定者への十分な理解とサポートを得ることなど包括的なマネジメント力が求められる。しかしながら、医療機関の感染制御担当者のマネジメント力におけるエビデンスは非常に少なく、それを学ぶ機会も限られている。

そこで当シンポジウムでは、医療マネジャーとして活躍されている小西竜太医師、感染制御の施設トップリーダーの立場から本田仁医師、組織横断的活動の調整役を担う立場から大友陽子看護師、薬剤師としての専門性の発揮を期待される実務者として浦上宗治薬剤師にご登壇いただき、感染制御担当者に求められるマネジメント力の要点を共有し、各医療機関の感染制御担当者に役に立つマネジメント力の内容を検討したい。

SY14-4

### 臨床現場で専門性の発揮を期待される実務者として ～薬剤師の立場から～

[演者] 浦上 宗治:1

1:佐賀大学医学部附属病院 感染制御部

経済学者のP.F.ドラッカーはマネジメントを「組織の人たちを生き生きとさせ、高度な成果を上げることである」と説いている。本講演では薬剤師の立場から抗菌薬適正使用について、医療者が前向きに取り組みながら有効性、安全性、耐性抑制に優れたアウトカムを得るというchallengingな目標を達成するためのマネジメントについて述べる。

Antimicrobial stewardship (AS) における薬剤師の役割の重要性は国内外で顕著となり、その役割も確立されつつある。米国感染症学会のASプログラムガイドラインでは抗菌薬の許可制と前向き監査とフィードバックを推奨しており、国内で浸透している届出制は日本独特の文化で国際的なコンセンサスはない。これらの介入の成果は継続的なコミュニケーションによってもたらされ、届出制を単なる書類運用にとどめることなくフィードバックの通過点として感染症治療に必要な情報を届けるためのコミュニケーションにつなげることが重要である。佐賀大学病院では許可制、届出制、前向き監査とフィードバックを薬剤ごとに使い分けて運用しており、いずれを選択しても最終的には処方医とのコミュニケーションに通じる点は共通している。講演では当院のAS活動で得られた臨床成績や抗菌薬使用動向のアウトカムについても触れる。

抗菌薬適正使用のマネジメントには、その多くが処方行動の変容を必要とする。「変容」とは内面的・質的な変化であり、表面的な「変化」とは異なる。変容には時に生みの苦しみを伴うが、機能停止に陥らないマネジメント力が必要とされる。例えば、主治医の選択した抗菌薬がICTの提案と異なるものであっても、治癒が見込めない様な選択でなければ主治医科の選択を尊重するという姿勢も場合によって必要である。行動変容の初期は主治医が抗菌薬適正使用の実践を実感できることが重要であり、日々の臨床に寄り添いながら経過をフォローするスタイルを心掛けたい。

